
THE
Olympic Golf Club



JANUALY 2001 VOL. 3

大川 清・上林孝典・五嶋雅徳

21世紀の ゴルフを語る

「明けて、おめでとうございます。新しい年は改革の年でもあります。オリンピックゴルフ倶楽部は、新しい時代にふさわしい陣容を整えるべく、体制を刷新しました。大川 清会長を新理事長に選り、初のキャプテンとして大川会長の長年の友人である伊藤忠商事の元副社長、上林孝典さんを迎えました。21世紀にふさわしく、メンバーばかりでなくビジターや地域の皆様にも親しまれる、さらに素晴らしいゴルフ場を目指すための新スタートです。お二人の抱負を中心に、新世紀のゴルフのあり方や、それぞれのゴルフの思い入れなどを本音で語ってもらいました」

キャプテンって何？

五嶋「大川理事長と上林キャプテンという最強のスタッフになり、我々メンバーは大変喜んでおります。まず、理事長から新体制への抱負を語って下さい」

大川「私は経営する立場ですから、金儲けに走るかわからない（笑）。だから、今回の改革は、メンバーの意見を吸収してもらい、うちとしては聞きづらいかもしれない意見でもそのまま伝えていただく方がほしい、ということで行ったのです」

五嶋「キャプテンという制度はオリンピックでは初めてですから、メンバーを代表する立場で上林キャプテン、ご意見を」

上林「大川会長の家族で経営されているゴルフ場に他人が入ってバランスを取るのも大事なことから、と決心しました」

五嶋「キャプテンはどうあるべきだというイメージはありますか」

大川「私からこうして、なんて条件はない」

上林「僕はね、OKを言った日にキャプテンは何をするんだと、会報に書いてくれと注文した。そし



て、理想的なキャプテンとは何をしたらいいのかわかなくて、と宿題を出したんです（笑）」

五嶋「キャプテンとはなんぞやと分かってない方がいらっしゃると思うんです」

大川「日本のほとんどのコースはキャプテンシステムなんです。メンバーと仲良くやっていただいて、コースの間違いを鋭く見抜いて、指摘してくれる。もう一つは、経営側の相談にも応じる。だが、たとえ経営側に嫌われてもメンバーの代表になれば最高のキャプテンじゃないですか」

五嶋「メンバーにも注意してもらわなくては」

大川「それは私は言えない（笑）」

五嶋「キャプテンはある意味で辛いですね」

大川「だから、そこまで言わんと、私と仲良くシングルになりましょう（笑）」

交友録

五嶋「上林さんのことをあまりご存知ない方もいらっしゃるかも分かりませんので、少しご紹介を。京都の宇治のお生まれで、同志社大学を出られて伊藤忠に入られた。同志社では、野球部にいらしたとか」

上林「いや、誤解があったらいけないので言いますが、野球部は入ってすぐ辞めました。きわめてプロ的だったから、どうしようもないと」

五嶋「伊藤忠では長いことソウルにいらしたわけですよね。日韓条約が成立して日韓の新しい時代が始まった頃ですね」

上林「1963年の8月から行きまして、13年間いました。その間、韓国が漢江の奇跡と呼ばれる経済発展

を遂げ、私の青春もその真ただ中でした」

五嶋「ゴルフはそこそこ覚えられたのですか」

上林「いえ、ゴルフは最初に赴任したマニラでした。中古のマグレガーのターニーでね」

五嶋「懐かしいクラブですね。さて、会長はご存知の通り、日本アマのチャンピオンで、世界シニアのチャンピオン。最近は関西のグランドシニアで4連勝されて、プロみたいなんですけど、会長から見られて上林さんのゴルフはいかがですか」

大川「ハハハ、普通の方です」

五嶋「個性のある方ですか」

大川「個性はありますね。本当に、こう、商社の偉い方の、普通のゴルフ（笑い）」

上林「アハハハ」

五嶋「半世紀のおつきあいとか。一緒にプレーされる事はよくあるんですか」

大川「最初にお会いしたのはソウルでしたね。それもゴルフ場でした」

上林「会長は韓国の偉い方とゴルフされてて、僕は僕で別にゴルフしてて引き合わされたのが最初でした。昭和39年ぐらいかな」

五嶋「そうすると、オリンピックは創立当時からメンバーで……？」

上林「いや、その前の、ゴルフ場をやりたいと言われたときから、相談にのっていました」

上林さんはシングルに失敗

五嶋「上林さん、ゴルフでの一番の思い出は？」

上林「僕ね、本当はシングルになれたんです」

五嶋「ほおーっ」

上林「大川先生について2年間、みっちりゴルフを習ったことがあるんですが、あと一年やったらシングルにさせてもらえる、という段階まで来て、東京へ転勤になった。その気になって、会社の仕事をやりくりしてゴルフをしようと思っていた矢先だったのに」

五嶋「ハハハハ」

上林「それで、シングルはもう夢になりました」

五嶋「一番いいときのハンデは？」

上林「13です」

五嶋「会長の思い出は？世界シニアの時ですか、日本アマの時ですか」

大川「私の場合、30歳近くになって、柔道から転向して健康目的にやったから何かを取ろうという目的ではないんです。世界シニアの優勝は第23代だったのですが、それまで一度だけオーストラリアの選手が優勝しているんですが、あとはアメリカばかり。それで、決勝では世界中の人が私を応援するのには驚きと感激でした。」

五嶋「アジアでも初めてですか？」

大川「アジアだけでなく、ヨーロッパでもない」

五嶋「へーっ、それはすごい。まさに世界のチャンピオンになられたわけですね。ところで、お二人の趣味は？会長の書道はよく存じていますが」

大川「はづかしい。ほかには、囲碁もやりますし、ひまがあったら漢詩も」

五嶋「キャプテンは観劇とか？」

上林「京都ですから歌舞伎とかね」

21世紀のゴルフとは

五嶋「本年は日本でゴルフが始まってちょうど100年になるそうです。新世紀、ゴルフ場はどうあるべきか、課題は多いと思いますが、ゴルフ界全体のことと、オリンピックゴルフ倶楽部はどうあるべきかと、二つお聞きしたい」

大川「私は自分がゴルフが好きで、結局、ゴルフ場を作ることになってしまった。いろんな国でプレーし、そして作ったのですが、理想のゴルフ場とは、私の考えは誰もが一緒になって楽しんでプレーできる場所。ゴルフは、年がいくつになっても出来るスポーツです。体にも精神面の健康にもいい。そのためにオリンピックにはテニスコートやプール、温泉を作り、家族や近所の人にも楽しめる新しいゴルフ場を目指してきました。今後も仕事やもろもろの雑事を忘れて一日をエンジョイ出来るようなゴルフ場にしたい」

上林「会長と口裏を合わせるわけではないが、同じ考えです。ゴルフは公平なゲームで、高齢化の時代に最も適したスポーツだと思う。これまでは、ある特殊な階級の人がやっていたが、大衆化するのはいいことです。ただ、やはり品格は持っていたい。ポピュラーでありさえすればいいというんじゃないくて」

五嶋「なるほど」

大川「風格とまでいうと大げさだが、特別にエリートでなく品位のある真面目なコース、何となく心休まる……」

五嶋「品格を備え、みんなが仲良くできるクラブライフに、ということですか。そういう意味でもたとえばメンバーの家族に対してさらに何かドリームプランはありませんか」

大川「我々親子3人で月曜日ごと経営会議をするんですが、ひとつの夢としてアメリカのように入会金を安くして、家族はメンバーと同じ待遇を受けることにして、その子供が18か20になったら家族待遇は終わりにするなどの制度を考えなくてはいいかなと思っています」

五嶋「私も海外でゴルフをしますが、おおらかで、家族的な雰囲気ゴルフ場が多いですね。海外勤務の長い上林さんご意見は？」

上林「一つの案として、ハーフラウンドのシステムを作るんです。ハーフだけゴルフして後は泳いだりテニスしたりするのはどうでしょう。外国にはよくある例です」

五嶋「ああ、いいですね。日本人はワンラウンド回らないと満足しない人が多いですが、ハーフの後、家族で楽しむのはいいことですね。さて、コース内にさらに木々を増やすような計画はおありでしょうか。たとえば、アザレアつつじで有名なオーガスタのようなコースを作るとか」

大川「花はとっても好きです。同時に、花が咲いたら実が生ったらもっといい。その計画を実行に移そうと思ったら、この不景気で」

五嶋「はい、はい」

大川「不景気がなければ、もっとたくさん、いろんな果物が生っていた。今、あるのはカキくらいですね。葉が落ちた後のカキはきれいで、お客



さんがいつでももぎ取って食べていただければ、心豊かになる」

五嶋「子供時代に帰れますね」

大川「リンゴもありました。スモモ、オリーブ、カリンも生ってます」

五嶋「私案なんですけど、ホールインワンした方が記念の植樹をされますが、同じようにメンバーの皆さんに自分の木の植樹を呼びかけてはどうでしょう」

大川「それは本当に有難い話です。でも、これまでも木を植えてくれ、といってお金をいただいたことがあるんですが、お返ししてるんです。なぜかという、うちの土壌は下が岩盤で思うように育たないんです。メンバーさんには申し訳ないんですが、工夫してもっと木を植えようとはしています」

五嶋「今年、コース改造の予定は？」

大川「まず、14番ですね。よく飛んだ人はいいが、飛ばないとセカンド地点からサード地点がよく見えない。人がいるのか、OBラインがどこか、分かるようにしたい」

上林「メンバーのアンケートでもね、安全に絡むものは大事だから直してくれと、ありました。12番もそうですね」

大川「難しいですが、ご指摘がある分については検討します」

ゴルフ上達法

五嶋「メンバーみなさんが聞きたいと思うんですが、大川会長は、何でそんなにゴルフがうまくなられたんですか」

上林「ワハハハハ」





大川「……」

五嶋「ゴルフをうまくなるコツは何だと思えますか」

大川「はっきりしたものがあつたら私がほしい。ハハハ」

五嶋「本を読んでいたら、要するにアドレスとあそこに打つんだという目的意識だというんですね」

大川「アマチュアの私が言うのは口幅ったいですが、難しく考えないこと。しかし、一応の手続きは省かずに。アドレスの時の足幅、クローズかオープンか、肩の位置、ちゃんとした姿勢、それはやはりオーソドックスに考えて。あとは深く考えずにやるといいんです。理屈が多すぎる人は上達しません」

五嶋「上林さん、プレーでいい話でもあれば」

上林「いつも自分に腹を立てるだけ、いい思い出はありません。会長からよく言われるんですが、相手に合わすゴルフをし過ぎるんです」

五嶋「お人柄が出るんですね」

上林「お客様あつての我々の商売でしたから身にしみてまして、回る相手を意識するんです。これからは、意識せずにいきたい」

五嶋「会長はよく、3つのことを言われてますね」

大川「ああ、無理、無駄、むら、ね。これは経営学です」

五嶋「どうですか、経営ご出身の、元商社の副社長としては」

上林「ハハ、いいことですね。ゴルフにも経営にも通じる話ですね」

五嶋「ゴルフで明るくなって楽しくなれば一番いい、と思つてらっしゃる？」

上林「そうです。一日かかって楽しみに来るんだから、楽しく楽しくというゴルフがいい。勝ったり負けたりもいいけど……」

五嶋「ゴルフは健康に一番いいという人がいますが、どうですか」

上林「全くそうですね。歩くことが健康の基本ですから」

五嶋「では、お体はどこも」

上林「ええ、幸か不幸か（笑い）」

五嶋「健康な体でキャプテンとしてぜひ、頑張ってもらいたいですね」

大川「キャプテンがあまり上手になったら嫌われるからね（笑い）」

上林「ハハハハ」

五嶋「上林さんに初めてお会いして、笑顔の素晴らしい方だと思いました。我々会員の代表にふさわしい、と喜んでいるんです。会長については、この会報の前号で、どなたかが、会長がいつの日もにここに笑いながら（調子はどうか）と迎えて下さるのがうれしい、と書いておられた。会長にはファンが多いですね」

大川「本当ですか。嫌う人もいますよ」

五嶋「そんな人、いないですよ」

大川「言いたいことを言い過ぎるって」

上林「それは僕のことを言ってるの（笑い）」

五嶋「お二人がトップの両輪になられて、我々メンバー一同喜んでいきます。21世紀も、お二人の明るい笑顔がゴルフ場に満ち、いいお手本になっていただいてさらに楽しいゴルフ場にしていきたいと思います」

上林「同感ですね」

大川「私もそのように努めたいと思います。どうぞ、宜しくお願いします」



大川 清のひとりごと 「ボランティアとキャディ様」

1968年度世界アマチュアゴルフ選手権競技が、オーストラリア メルボルン郊外のロイヤルメルボルンG.C.で開催され、選手として参加した時のことである。

このコースは、1926年開場の英国人アリスター・マッケンジー氏設計による世界を代表する名門コースで、檜、檜等の大木とヒースが繁ったなだらかな丘陵地を大胆に切り開き、その自然の起伏を最大限に生かして作り上げられた傑作である。特に印象深いのは14番ホール470YのPar4である。ティーインググラウンドから180Y～220Y地点のフェアウェイ中央に、2～3mの高さで盛り上がったバンカーが大きな口を開け横たわっており、バンカー越えに自信の無いプレーヤーは迂回しなければならない。セカンドはブッシュの谷間越え、グリーンは小高い丘の上に配置されガードバンカーは旗竿が見えない位深く絶壁になっている。非常に手強いホールである。グリーンは緑よりも黄色が目立つ程刈り込まれており想像を超えた早さである。練習ラウンドではバターした球がグリーン外に転び出ることもしばしば。フェアウェイは、広狭の変化をなし良く手入れが行き届いているが、谷越えのラフやプレーエリアから少しはずれたラフは雑草が伸び放題である。コース全体から見るとその綺麗に整備された美しい女性的な面と、荒々しくチャレンジ精神を駆り立たせる男性的な面とが豊かな森林により優しく包み込まれている、見事なまでに「美と強」の共存が調和をなす素晴らしいコースである。

スタートマスターから紹介された中年紳士は、本大会の為に全国から集まったボランティアの一人で私のキャディということでご難くお願いすることになった。明るくダンディな方でどうも大変ゴルフが好きなようで、練習場から質問攻め。「テークバックが小さいのになぜそんなに飛ぶの?」と言った調子。試合の最終日、17番ホールのPar5で私の打った第2打が、グリーンガードバンカーに掴まった。苦心して丁寧に打ったその感触が良いと思ったと同時にキャディ氏が歓声をあげながらバックを放り捨て両手を大きく振りながら踊りだした。私がグリーン上に現れると満場から激しい拍手と口笛が沸きあがった。カッピングしたのである。踊り止まないキャディ氏を見て思うに、彼と一週間共にする間一度も心配そうな暗い顔を見たことが無いのである。その屈託の無い明るくて楽しい表情、良いプレーをした時は自分のことの如く喜ぶことが出来る人間性に感銘を受けると共に、その精神的余裕は、平和が続く国の環境から生まれるのかと羨ましく思った。

その頃の日本ではボランティアという言葉すら馴染みが薄かったように思うが、去年のシドニー・オリンピックでもボランティア活動で大成功を修めたことを聞き「やはりオーストラリアはボランティアの先進国かな…」と思いながら、そのキャディ氏のことを懐かしく思い出した。

私も21世紀からは余裕のある精神の持ち方の勉強に励む所存であります。



No.14 ティーインググラウンドから、FWを望む



グリーン横のガードバンカー